

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 キチジ

学名 *Sebastolobus macrochir*

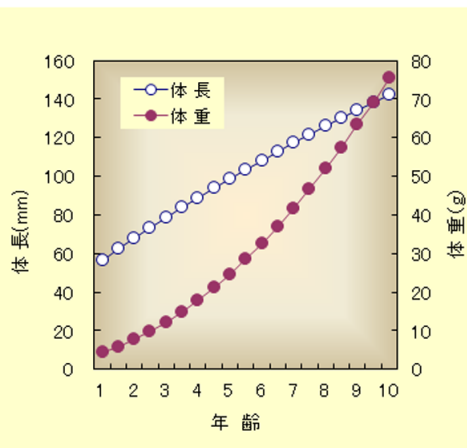
系群名 太平洋北部

担当水研 東北区水産研究所



生物学的特性

寿命: 20歳程度
成熟開始年齢: 雄5歳(100%)、雌10歳(11%)、11歳(35%)、12歳(69%)
産卵期・産卵場: 1~4月、分布域全域
索餌期・索餌場: 周年、水深350~1,300mの深海域
食性: エビ類、オキアミ類、クモヒトデ類、端脚類、多毛類、魚類
捕食者: マダラ、アブラガレイ

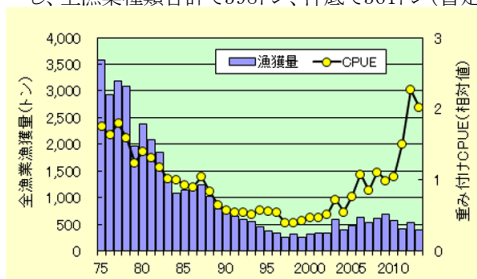


漁業の特徴

太平洋北部では、キチジは主に沖合底びき網漁業(沖底)で漁獲されるほか、小型底びき網漁業、底はえ縄、底刺網でも漁獲される。1990年代以降、沖底船は9~12月にスルメイカを狙って操業することが多く、スルメイカより深場に生息するキチジに対する漁獲圧は弱まっていた。しかし、震災後の2011年以降、加工場の減少やマダラの水揚げ制限等により、鮮魚として出荷できるキチジ狙いの操業が増加している。

漁獲の動向

全漁業種類による漁獲量は1975~1997年にかけて減少した。沖底の漁獲量も1970年代には2,000トン前後と多かったが、1997年には過去最低の229トンとなった。その後、沖底の漁獲量は増加し、2003~2010年に500トン前後となったが、東日本大震災の影響で2011年には減少した。2012年に震災前の水準まで回復したが、2013年には減少し、全漁業種類合計で398トン、沖底で361トン(暫定値)となった。

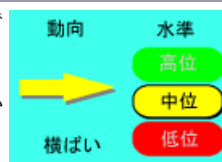


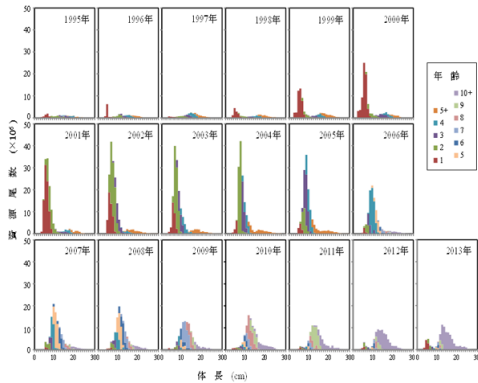
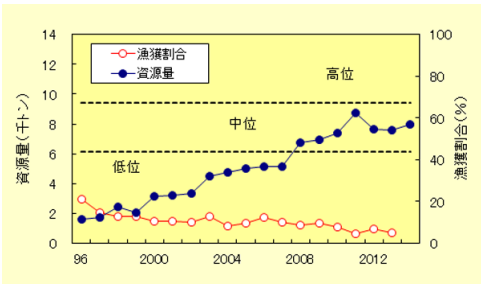
資源評価法

秋季にトロール網による底魚類資源量調査を実施し(水深150~900m、計113地点)、面積一密度法により資源量を推定した。調査海域は青森~茨城県沖で、太平洋北部のキチジの分布範囲をカバーしている。本調査で用いたトロール網の身網による採集効率(網の前にいた魚が網に入る比率を示す係数)にLogistic式を仮定し、この値を用いて資源量の計算を行った。

資源状態

2011年以降のCPUEは急激に増加したが、東日本大震災の影響により福島県沖で操業できないなど、操業実態が変化していると考えられる。キチジのような寿命が長い種では、急激な資源の増加は考えにくい。2011年以降のCPUEは資源動向を反映していない可能性が高いと判断した。そのため、資源量推定値の推移から資源状態を判断したところ、資源は中位水準にあると判断され、資源量推定値が過去5年では横ばい傾向にあることから、資源の動向は横ばい傾向と判断される。





トロール調査の面積-密度法 (Logistic式による採集効率を採用) から得られた体長組成の推移を示す。

管理方策

資源量は2000年代に増加したと考えられる。この増加は豊度が高かった1999～2002年級群の成長によるものであるが、その後は加入の少ない年が続いており、近年、資源量の増加は頭打ちとなっている。また、2005年以降の資源尾数には減少傾向が認められる。良好な加入がない場合、資源量は減少傾向に転じる可能性が高いことから、漁獲を抑えることで親魚量の増加を図ることを資源管理目標とした。キチジは成長が遅く、成熟年齢が高齢であるため、管理基準値にF40%SPRを採用し、基本規則1-3)-(2)に基づきABCLimitを算定した。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABCLimit	370トン	1.0F40%SPR	0.06	5.3%
ABCtarget	300トン	0.8・1.0F40%SPR	0.05	4.3%

- ABCは1トンの位を四捨五入した値

資源評価のまとめ

- キチジの資源量は中位水準にまで回復したが、動向は横ばい
- 1999～2002年は加入量が高かったが、その後は加入の悪い年が続いている
- 2005年以降の資源尾数には減少傾向が認められる

管理方策のまとめ

- 漁獲を抑えることにより、親魚の増加を図る
- 単価が安い小型魚(体長15cm以下)の漁獲を抑えれば、親魚量が増加し、その後の加入量の増加も期待できる
- 漁獲開始年齢の引き上げは、キチジの資源管理に有効な方策と考えられる

執筆者: 服部 努・伊藤正木・成松庸二・柴田泰宙・永尾次郎

資源評価は毎年更新されます。